

山村文化を読む

令和3年4月11日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長坪井利一郎

1. はじめに

別子銅山について郷土資料を当たるとなると、新居浜史談、益友、山村文化を見ることになる。新居浜史談は発行が続いているが、残念なことに山村文化と益友は発行が途絶えてしまった。益友は多方面にわたり別子銅山に関する情報が得られ、銅山学習の助けとなるので「益友の中の銅山関係のリスト」を作成した。

市民から「山村文化」が寄贈され、欠本を既に図書館が収集した中から補ってフルセットにしたので、別子銅山コーナーに並べた。銅山学習の手引きとして、益友に続いて「山村文化の総目録」を作成した。併せて、読み直して気になった箇所を綴ってみる。

2. 発行と命名

山村研究会は、会長・伊藤玉男の「発会に当たって」の巻頭文の日付が平成7年9月となっているので、一応そのころの発会としておく。(第22号の新春座談会の中で、事務局を担当した山川静雄さんは、平成7年10月に研究会が出来たと話している。)そして「山村文化」の創刊は平成7年10月20日である。季刊で定期刊行してきたが、平成17年3月31日発行の第35号で閉じてしまった。

会長の巻頭文によると、「別子銅山や立川銅山のこともっと知りたいと思うなら、銅山と関わってきた山村のことを知らねばならないと思った。そんなことを考えている内に自然と浮かび上がってきたのが山村研究ないし山村文化という言葉だったのである。……山村研究会とした次第である……素人が調べたり考えたりすることは、既にその道の玄人がやっているはずだが、ある点を限界に研究成果が上がっていないように思えてならない。それは恐らく既成の概念があって問題を色眼鏡で見ているからではあるまいか。色眼鏡をかけないで問題を見つめるということで、終始この姿勢を保っていれば必ず良い成果が得られるものと確信する。併せて、自然環境の持つ役割を新たな考察手段として採り入れるべきだと考えている。」と述べられている。

3. 山村文化の総目録

号数	標題	出筆者
創刊	山村研究会発足にあたって 特集－立川銅山道	伊藤玉男
	泉屋道と立川銅山道筋(上)	伊藤玉男
	立川銅山道筋	高橋 幹

	立川銅山道を探る－1枚の絵図から	塩田康夫
	地名あれこれ－西赤石	伊藤玉男
2号	泉屋道と立川銅山道筋(下)	伊藤玉男
	菅平発見記	高橋 幹
	立川銅山上野吹所	塩田康夫
	第一回現地研修に参加して(中七番)	西 俊明
	地名あれこれ－前山・山方・木方	伊藤玉男
3号	山村と東南アジア	藤本鐵雄
	別子山の木地屋	伊藤玉男
	別子銅山への電気導入について	二ノ宮馨
	旧広瀬邸－遠州流に関する一考察	高橋 聡
	土佐への道筋－序説	塩田康夫
	別子銅山の遺跡－第二通洞	高橋 幹
	地名あれこれ－大阪屋敷	伊藤玉男
4号	「日本の鉱山文化」展を見て	松下博彦
	笹ヶ峰修験道と清滝信仰(上)	伊藤玉男
	土佐への道筋－須領道	高橋 幹
	岩屋－赤石越えの道	塩田康夫
	第二回現地研修会報告(土の峠～須領道～黒石)	工藤 順
	別子銅山の遺跡－上・下部鉄管道	高橋 幹
	「歓喜の鉱山」編集を終えて	高橋利光
5号	銅の道(講演録1)	伊藤玉男
	鉱山と市民を読んで	藤本鐵雄
	いろりを囲んで	福本成臣
	再び立川銅山道について	塩田康夫
	別子銅山の遺跡－出合峠界限	高橋 幹
	地名あれこれ－豊後・余慶	二ノ宮馨
	「えひめの山旅 赤石の四季」発刊のご案内	西 俊明
6号	炭の道(講演録2)	伊藤玉男
	炭中宿小坪谷は何処に	高橋 幹
	別子銅山の遺跡－炭中宿	塩田康夫
	別子銅山－明治期の数値試算	高橋利光
	地名あれこれ－瓜生野	二ノ宮馨
	第三回現地研修会報告(中の川～出合峠)	西 俊明
7号	笹ヶ峰修験道と清滝信仰(下)	伊藤玉男
	佐島製錬所跡見学記	寺西啓容

	保内町を訪ねて思うこと	藤本鐵雄
	海のあらがね道	塩田康夫
	別子銅山の遺跡－寛永谷収銅所	高橋 幹
	地名あれこれ－銅山峰	伊藤玉男
	谷の名がどうして変わるのか	二ノ宮馨
	赤石山系の民話(一)	安森 滋
8号	第四回現地研修会報告(フォレスターハウス)	西 俊明
	熊野の森に生きる (1)	宇江敏勝
	「幽翁」を読み直す	藤本鐵雄
	別子風水害を考える	二ノ宮馨
	別子銅山の遺跡－セリ割隧道	高橋 幹
	別子炭中宿－遺稿	塩田康夫
	地名あれこれ－樅の木	伊藤玉男
	赤石山系の民話(二)	安森 滋
9号	別子銅山の煉瓦	伊藤玉男
	熊野の森に生きる (2)	宇江敏勝
	「箱廻し」又は「デコ廻し」	木村 章
	地名あれこれ－夏切	二ノ宮馨
	哲人の墓碑	伊藤玉男
	別子銅山の遺跡－都間符	高橋 幹
	赤石山系の民話(三)	安森 滋
10号	節目によせて	伊藤玉男
	特集－私と別子銅山	高橋 聡・木村 章
		高橋利光・塩田康夫
		高橋 幹・西 俊明
		山本啓二・寺西啓容
	第五回現地研修会報告(四阪島)	寺西啓容
	四阪島の歩みを辿る	藤本鐵雄
	地名あれこれ－筏津	伊藤玉男
	別子銅山の遺跡－高橋製錬所	高橋 幹
11号	銅山峰の落葉松	伊藤玉男
	別子銅山の石垣 1	高橋 幹
	写真は語る－前山と牛車道	編集局
	第六回現地研修会－写真文化の村	
	地名あれこれ－保土野・白猪谷	二ノ宮馨
12号	新たな出発	高橋 幹

	再生の自然(上)	伊藤玉男
	土佐への道筋・再び	塩田康夫
	端出場いまむかし	橋本久美子
	写真は語る－勘場	編集局
	別子銅山の遺跡－金鍋坑	高橋 幹
1 3 号	再生の自然(下)	伊藤玉男
	新居浜の思いで	吉田知之
	別子銅山の石垣 2	高橋 幹
	写真は語る－目出度町風呂屋谷	編集局
1 4 号	旧広瀬邸改修工事の概要とその意義	高橋 聡
	別子銅山の遺跡－石ヶ山丈停車場跡	高橋 幹
	三ツ森峠を越える－高嶺発電所建設	二ノ宮馨
	写真は語る－旧吹所	編集局
1 5 号	別子山中の煉瓦－中間報告	高橋 幹
	山の町・東平	高橋利光
	第八回現地研修会報告(上部鉄道)	吉村久美子
	地名あれこれ－長門・殿ヶ関	二ノ宮馨
	写真は語る－高橋製錬所	伊藤玉男
1 6 号	特集－端出場	
	別子鉾山端出場を探る 1	伊藤玉男・山川静雄
	端出場の煉瓦	高橋 幹
	地名あれこれ－端出場・打除	二ノ宮馨
	端出場及び鹿森での生活	山村研究会
	別子銅山豆情報－端出場水力発電所	高橋利光
1 7 号	特集－東平と端出場	
	東平での生活文化探求	山村研究会
	東平の煉瓦	高橋 幹
	別子銅山豆情報－住友別子病院東平分院	高橋利光
	別子鉾山端出場を探る 2	伊藤玉男・山川静雄
	東平・端出場関連別子銅山略年表	編集局
1 8 号	別子鉾山端出場を探る 3	伊藤玉男・山川静雄
	第九回現地研修会報告(端出場・鹿森)	工藤 順
	住友有芳園を訪ねて	高橋利光
	別子銅山豆情報－鉾山従事者	編集局
1 9 号	東平の鉾山関係施設	編集局
	カラマツの故郷紀行	伊藤玉男

	別子銅山の遺跡ー小足谷収銅所	高橋 幹
	別子銅山記念館の設立と運営について	別子銅山記念館
20号	五年を迎えた山村研究会	高橋 幹
	特集ー私と山村文化	
	山村文化ー更なる飛躍に向けて	高橋利光
	新居浜と文化	近藤哲也
	近代化産業遺産	高橋 聡
	第十回現地研修会報告(佐々連鉦山)	近藤哲也
	川之江ー柳陣屋門	塩田康夫
	勤労者の貴重体験	久川利幸
	箱膳	伊藤玉男
21号	特集ー四阪島	山村研究会
	座談会	
	四阪島関係資料ー変革・略年表	
	別子銅山の遺跡ー煙突山	高橋 幹
	お稲荷さんを訪ねて	伊藤玉男
22号	特別企画ー新春座談会	山村研究会
	会長あいさつ	高橋 幹
	講演ー絵図から見た別子銅山の神格化	末岡照啓
	座談会	
	写真は語るー木方再考	伊藤玉男
23号	点の記で見る別子銅山	高橋 幹
	別子本舗	伊藤玉男
	蘇った鹿森	山川静雄
24号	ノリイモとタズ	伊藤玉男
	別子学園沿革誌ー明治期	佐々木由貴子
	別子銅山の歴史と自然 1	伊藤玉男
	インタープリテーションについて	高橋 聡
25号	別子大立坑と巻揚機	木邑 章
	喜三谷社宅跡の煉瓦	高橋 幹
	別子銅山の歴史と自然 2	伊藤玉男
	第十一回現地研修会報告(市之川鉦山)	近藤哲也
26号	やさしい別子銅山のあゆみ	高橋利光
	再び箱廻しについて	木村 章
	別子銅山の歴史と自然 3	伊藤玉男
27号	石ヶ山丈駐車場の煉瓦	高橋 幹

	坑内下部排水の問題に対する私見	木村 章
	別子銅山の歴史と自然 4	伊藤玉男
28号	別子銅山産業遺産の残存状況 1－四阪島	吉村久美子
	ナスビ屋敷伝説	高橋 幹
	頼み寺	伊藤玉男
29号	別子銅山産業遺産の残存状況 2－四阪島	吉村久美子
	16番本坑を基地とし、新竪坑を通ずる排水計画	木村 章
	第十二回現地研修会報告(東平・端出場・広瀬)	山村研究会
30号	産業遺産	高橋 幹
	別子銅山産業遺産の残存状況 3－四阪島	吉村久美子
	排水計画について	木村 章
	写真は語る－東延(上)	伊藤玉男
31号	写真は語る－東延(中)	伊藤玉男
	別子銅山産業遺産の残存状況 4－四阪島	吉村久美子
	別銅山の煉瓦－その形状からみた分類	高橋 幹
32号	写真は語る－東延(下)	伊藤玉男
	別子銅山産業遺産の残存状況 5－四阪島	吉村久美子
	別子銅山の歴史と自然 5	伊藤玉男
33号	多田銀銅山研修紀行	伊藤玉男
	新指定の文化財－別子山地区	伊藤 聡
	別子銅山の歴史と自然 6	伊藤玉男
34号	写真は語る－東延(終)	伊藤玉男
	座談会－中七番を語る	
	源兵衛舗	伊藤玉男
35号	別子ライン・ノート	高橋利光
	新文化財紹介－広瀬家墓所	
	御報告	事務局
	現地研修会のご案内－別子銅山写真展	
36号	銅山峰を仰いで	高橋利光

4. 気になった箇所

山村研究会発足にあたって(創刊)

別子銅山初期の開発についての考察は様々な角度・視点からなされていていいはずなのに「最初の発見者は切上り長兵衛」ということになっているから、それで一線を越えた新たな考察が生まれにくい。既成概念といえは聞こえはいいが、要は根も葉も無いような伝説や作話に汚染されている部分が多分に在るように思う。

伊藤玉男は銅山峰直下の角石原のヒュッテに暮らし、新居浜市街を見下ろしながら別子銅山史を研究してきた経験から感じ取った歴史観を述べた箇所である。

泉屋道と立川銅山道筋(創刊・2号)

山村研究会結成の動機は、別子・立川両銅山の運搬路の解明に行き詰まり、近隣諸村に何か手がかりが残っていないかと考えたと述べられている。

泉屋道については天満道も新居浜道もその道筋は、ほぼ判明している。しかし、立川銅山道筋は1/3も追跡できない。「新居・宇摩天領二十九箇村明細帖」で立川銅山の中宿が立川本村内に在ることは見ているが、場所が特定されていない。立川銅山に関する「新居・宇摩天領二十九箇村明細帖」の立川山村の項だけを読んでいた。はじめに「近隣諸村に何か手がかりが残っていないかと考えた。」と言っているにもかかわらず、近隣の村の項を読んでいる。種子川山村の項に、「年貢米を立川山村の立川銅山中宿と別子銅山中宿へ運び、距離は一里半である。」とある。ほぼ同じ所に両中宿があることになる。別子銅山の中宿の近くに立川銅山の中宿があることが分かる。

「立川御銅山絵図」から立川銅山～落シの山道を立川銅山道筋と読み取っている。しかし、土ヶ峠への道と須領道を立川銅山道筋と読み違えて論を進めている。中宿の位置を見落としした結果である。泉屋道で雲ヶ原越えは、銅山越えから雲ヶ原までの標高差256mの荷揚げを疑問視した伊藤玉男にしては、落シから土ヶ峠への標高差301mの荷揚げを肯定しているのはうなずけない。

平野部の銅山道筋については、共用説と分離説がある中で、伊藤玉男は新居浜の太鼓祭りを例にとり分離説を取っている。立川銅山仲持と別子銅山仲持が仲良く住み分けたから争いがなかったのも、歴史的記述が残っていないと述べる。歴史的記述がなければ分離説になるのか。これでは史料は読めなくなる。

応仁の乱後の文明17年(1485)に起こった山城国一揆は、戦後長らく「住民による自治共和国建設運動」として、その反権力性が高く評価されてきた。ところが、1980年代に、細川政元黒幕説が提起された。この説の主な根拠は、国一揆を主導した「国仲三十六人衆」の大半が細川政元に奉公していたという「狛野荘加地子方納帳」の記述である。政元は明応の政変というクーデターを起こすほどの策略家なので一枚かんでいたと考えるのも無理はない話である。しかし、政元が山城国一揆に関与した形跡は一切認められない。巧妙な陰謀だったから、史料に痕跡が残らなかったとの見方も無くはないが、苦しい歴史の見方である。

別子銅山史を考察するには、これまでに書かれたものを読んでいかなければいけない。ここ40年間だと手元の図書・資料目録で872点である。疑問点、未解決の問題の糸口は、全く関係ない本の中にヒントがあることがよくある。だから当たり前次第に本を読んでいかなければいけない。

立川銅山道筋(創刊)

立川山村から枝村の大永山村が分かれるときに、立川銅山道筋の人工物を以って境界と定めたのではないかとの推論を逆説的に述べている。論理的に言って、「逆は必ずしも真ならず。」「対偶は必ず真である。」立川銅山道筋と別子銅山道筋とは一貫して分離説をとっている。

平坦地ならいざ知らず、山の傾斜地に直線の道が作れるだろうか。傾斜地は階段になっていたというのだろうか。住居表示の道路での人工的区分が念頭に在るように思われる。

立川銅山道を探る－1枚の絵図から(創刊)

「立川御銅山絵図」から立川銅山道筋を読み取ろうと試みているが、きちっと絵図を読んでいない。宝永元年の幕府への願書から、立川銅山仲持が住友銅山新道に入っているポイントを上の橋として、寛永谷に立川銅山道筋を推定している。考察がまとまっていないままの発表である。平野部は共用説をとっている。

地名あれこれ－西赤石(創刊)

明治41年発行の陸地測量部の5万分の1地形図には西赤石山とあり、作業記録には銅山とある。大正元年完成の別子銅山の6千分の1地形図に銅山峰とある。西赤石の場合、測量士や職員を交えての検討の結果、「点名銅山、山名西赤石山」になったのではないかと推測している。

平成4年3月発行の「古文書で探るふるさと新居浜」の83ページに「宝永元年申五月御替地節入会山定之事」が掲載されている。兜山(現在の下兜山)から笹ノ峰(笹ヶ峰)までの山の図があり、西赤石山が「赤石」と記載されている。西条藩領の村と天領の村が交換された頃、既に西赤石山は「赤石」と呼ばれていた。

「嶺北側より見た立川銅山古図」の中の地名を読むと、従来「かうと谷」と呼んでいたのは「加分登峯」の崩字標記である。「かぶと峯」は西赤石山に当たる。西赤石山の北に兜岩の岩屋があり、その赤い露岩を包含して「かぶと峯」と呼んでいた。西赤石山頂は橄欖岩ではないが、兜岩の橄欖岩から赤石となったと考えられる。

地名あれこれ－大阪屋敷(3号)

スガ平が掲載されていると「大永山境目絵図」がある。拡大して絵図の中の地名等の書き字を判読するが、文字が潰れて半分くらいしか読み取れない。そんな中で、住友金属鉦山測量地図に出てくる、清滝南の「石ヶ休場」がある。

立川銅山道考で、「石ヶ休場」が一般名詞で、場所名が付加して「須領道の石ヶ休場」と特定されるようになる。第三泉屋道では、「石ヶ休場」を「石ヶ山丈」と強引に誤読して道筋が分からなくなっている。住友別子鉦山史でもそのままにな

っている。

絵図は大永山の物なので、東側の立川山は概略になっているが、切畑表示が数か所ある。「新居・宇摩天領二十九箇村明細帖」の立川山村の中の切畑の8町3反7畝の様子がうかがえる。

地名あれこれー前山・山方・木方(2号)

旧別子と呼んでいるエリアは、開坑から大正中頃まで別子銅山の本拠として栄えていたところである。宇摩郡別子山村大字銅山と言っていた。大字銅山の中の前山というのは、別子銅山の本拠(勘場・重任局)から見て正面に見える地域である。山方・鍛冶屋谷・延喜・木方・風呂屋谷などの地名が更に細かく付いていた。東山は、本拠から見て東側の山域で、西山は西側の山域であった。やがて西山と東山は山頂名になった。(要約)

西山と東山は山頂名で呼ぶので、前山もどこかの山頂を言うのだと勘違いしていた。新居浜平野の星越山は、王子権現が祀られているので王子山とも呼ばれる。それ以前には、前山と呼ばれていた。旧別子の例示に従うと採鉱本部からとなる。惣開の鉱山事務所から見て前山だったのか。

京都も市街地から見て、東山、北山、西山と山域を総称している。信州の松本平でもかつては西山、東山と方向で呼んでいた。

土佐への道筋ー須領道(4号)

杖立について「土佐全国ノ図」を元に論じているが、その図にどのように記載されているか見ていないので何とも言えない。「立川銅山古図」も挙げて、どう見ても杖立は土山越え附近としか考えられないと述べている。

「立川銅山古図」には、2ヶ所「杖立」が記載されている。①東平手前で「此路筋、土州杖立へ」、②土山越えに「土州越え杖立」。①は、土佐の国の杖立に至る道である記載ある。②は、土山越えは伊予の国内なので、ここが土佐の国でないことは明確である。伊予の国から土佐の国に越えて杖立がこの先に在る記載である。

文末に編集局の情報で、三ツ森峠の南300mに石積が見つかり、それが杖立炭宿の跡らしいと述べている。ここは、天正の陣で長宗我部が金子に援軍を送ったが、時すでに遅く、引き返すに当たって杖を立てたところからの命名である。

第34号の「中七番を語る座談会」で、ゲスの山口福松さんは、三ツ森峠の事を杖立とは言わないと思うと否定している。

笹ヶ峰修験と清滝信仰(4号・7号)

清滝信仰の開祖は、安政時代の初代・松村寅馬之助である。そして7代・伊藤宗寛まで続いた。一方、大生院・正法寺の笹ヶ峰修験は、昭和5年に正法寺住職に就

任した大西大詮が笹ヶ峰山頂に不動尊を祀ってからとしている。そして、笹ヶ峰保勝会の結成、笹ヶ峰8合目に丸屋(現在の丸山山荘)の建設、角野村の木下伝治郎の石鉄神社建立の笹ヶ峰異変が昭和8年に起こったと述べている。一等三角点ノ記一笹ヶ峰、日野和煦の西條誌を例示して、明治時代も、江戸時代も正法寺と笹ヶ峰の関係はなかったと述べ、正法寺の笹ヶ峰修験は昭和初期からとしている。

万延元年に小松藩庁編「小松邑志」には、「正法寺 往古は石鉄山別当にて、寺今の寺前の道の下にあり。・・・・文化年中西條の実相院と言へる修験へ先達を譲りしと云。大門杖立 土佐山笹ヶ峰の深山に在り。往古石鉄山権現笹ヶ峰にてしませし時大門の在る処なりと云。其頃は正法寺別当なりし故山号を石鉄山と云へる由。」とある。明らかに江戸時代に笹ヶ峰修験があった。なお、「古文書で探る・ふるさと新居浜」では、西条藩内の泉川、中村、金子、新居浜、船木、沢津、郷、宇高に山伏がいた。明治4年の調査では21人の修験者が記録されている。萩生、大生院は小松藩で、角野、種子川山、大永山は幕領だったので除外されている。

西条誌に記述している伊予池の瓶・壺は雨乞いの祭器ならばどこの村がしたのかと問うている。若水町の「史跡葛淵」の碑文を読んでいないことが分かる。

史跡葛淵

昔このあたり一帯は沼地であって、みずみずしい葎が茂り、その一部にひときわ深く清水をたたえて池状を呈し、岸のほとりに一本の青柳のゆらぐところ、そこが「葛淵」である。こんこんと霊水の湧き出るこの泉、ここには古来幾多の物語が伝えられ、神聖な霊泉として里人の信仰を集めていた。一宮神社に関係のある神の泉として毎年正月七日の早暁、身を清めた宮司がこの霊泉のほとりに祭場を設けて、祝詞を奏し霊泉の水を汲み、この水を神に供し、この水を用いて新撰を調理するのであった。このことから後世この町の名を若水町と呼ぶようになったものである。

又、この泉は雨乞いの霊地とされ、ひでりの際は笹ヶ峰に登り、日月の池の神水を汲んで持ち帰り、この水を葛淵の神龍に捧げて祈念すれば直ちに雨を賜ると云われて、いよいよ農民の信仰を集めていたものであった。また、歴史の上では、この「葛」は、新居の「津倉」のなまったものと考えられている。奈良朝から平安、鎌倉時代にかけてわが新居の庄は、東大寺、法隆寺などの寺社或いは佐々木盛綱などの武家の荘園であったが、これらの荘園所領者は、収納米を保管するために船積み便利なこの「葛淵」のあたりに倉庫を設けて「津倉」と呼んでいたものと推定される。又正平二十二年、予章記にもみえる「新居津倉淵」というのは、当時現在の「葛淵」のあたりに設けられてあった倉庫で、その津倉淵が次第に訛って「つづら淵」と呼ばれるようになったのである。

(注) 日月の池：大生院の正法寺が笹ヶ峰石土蔵王権現を祀っている笹ヶ峰は三重稜線で、主稜線の最高点が笹ヶ峰山頂である。副稜線は南側にあり、山頂の西側には窪地を形成している。雪解けの水が溜まって池になっていた。日月の池はこの窪地を指すと思われる。笹ヶ峰北面に向かう山道の横にも小さな窪地がある。以前にはこの窪地でも雨乞いの護摩を焚いていた。

天保13年に西條藩が書いた「西條誌」には、「(笹ヶ峰の)頂き伊予池と称する処あり。二、三間四方のくぼみなり。雨乞いに來る修験のものなせるよしにて旧はこの池に六、七寸囲いなる瓶を据え天水を蓄え、その水をとり帰り符を出し田野に立つ。その瓶、今は破れて数片かの窪に遣れり。これより一町ほど南に、土佐池というあり、これは、七・八間囲の窪にて、そこは土佐の国なり。すべて伊予土佐の分界、この峰の水流れを以て定め、峰より北を伊予とし、南を土佐という。」

銅の道・炭の道講演録(5号・6号)

昨年の講演では、別子銅山の最初の発見者は切上り長兵衛ではないと話した。市民の通説は、別子開坑二百五十年史話によっている。ところどころお話の部分がありますと著者が述べているのに、総て正しいと読み間違っている。泉屋道も第一次、第二次、第三次とミスっている。住友別子鉱山史もミスを訂正していない。二次史料で書くから歩いて現場を検証しなければならないと「仮説なき推論はあり得ない」(要約)

以上のように伊藤玉男は持論を述べている。

弘化元年の山林図の中の橋と丸尾の間のセリワリは、百雷峽のあたりになる。8号の「別子銅山の遺跡ーセリ割隧道」があり、東端索道のトンネル名で残っている。

元禄3年に田向重右衛門が別子へ調査に入る時に、炭焼の松右衛門を案内人として同行しているとの従来の説でなく、別子銅山を開発した時の炭木を調べる為であると新しい視点を発表している。別子山村とは逆方向の天満の庄屋である寺尾宅に寄っているのは、開発後の運搬を考えての推論と同様の視点である。

炭の種類として白炭、黒炭、黒炭半焼を上げている。別子銅山では工業用の黒炭半焼を使い、日窯と呼んでいた。高級品の白炭は茶の湯などに使ったとしているが、茶の湯の炭は、木口が菊型になる菊炭のクヌギの黒炭を使う。池田炭や伊予炭が最上とされた。白炭の原料はウバメガシで紀州や四国の海岸に自生する。信州では、ナラ、シラカバ、ハンニキでも白炭を焼く。ウナギ屋などで火力が強く長時間火持ちがするような使い方をする。

再び立川銅山道について(5号)

創刊号から掲載されている「嶺北側より見た立川銅山古図」の中の筆文字を活字に置き換えて、見る人に分かりやすく加工している。その中の「かとう谷」は、古図の中では「加分登峯」の標記である。

嶺北側から見た立川銅山古図の西赤石山に相当する箇所にかかれている「加うと谷」とこれまで読まれていたのは、「う」の字は「分」の崩し字であり、「谷」は同図中の「笹ヶ峯」と同じ「峯」である。「分」は濁音の「ぶ」だから、読むと「か

ぶとみね」となる。加分登峯を漢字表記すると兜峯か甲峯になる。

論者は第4号の「岩屋―赤石越えの道―」でも「別子銅山公用帳一番」の引用部で「かうと谷(西赤石)と・・・・・・・・」と記載しているから、住友史料館も誤読している。

別子銅山―明治期の数値試算(6号)

歴史を紐解いていくと、いつも話題は「今のお金にしていくらに成るか」となる。一般的には白米価格を係数に使っていた。自由価格でなく政府管理価格となると政策上の意図が入って係数としては適正でなくなりつつあるので、経済状況に対して敏感に反応する給与や報酬等を係数にして換算を試みている。

例えば、ルイ・ラロックの給料600円は、昭和60年では約1800万円となる。平成27年(昭和90年)に図書館で講義するに当たり、市職員の給料でスライドすると約3000万円になった。

谷の名がどうしてかわるのか(7号)

昭和30年代の地形図5万分の1「新居浜」では、足谷川が鹿森ダムで分岐して子女郎川になり、その上流で川又川、土山谷、鈴尾谷に分岐していた。足谷川の上流は寛永谷、柳、唐谷となっていた。県道新居浜別子線の時雨橋には足谷川表示している。現在市販の地形図「新居浜」では、前述の反対に表示されている。

東平発電所の放水口は発電所完成図書では小女郎川となっている。昭和53年の東平発電所の水利使用規則では放水口は足谷川右岸となっている。変更理由と変更年次は愛媛県に確認するしかない。(一部抜粋要約)

鹿森ダムの上流で、河川名の小女郎川と足谷川が入れ替わっていることを指摘しているが理由は不明である。日常生活的な呼称が、近代的な河川の本流・支流の考え方から人為的に入れ替えられた。

明治44年(1911)頃の愛媛県土木部発行の「愛媛県管内図」では、

小女郎川 (殿小屋方面から流下して)本谷川を合せて鹿森ダムまで。

足谷川 銅山嶺北下から下流種子川と合流する地点まで。

国領川 (足谷川が)種子川注口より瀬戸内海(河口)まで。

愛媛県管内図は、源流から下ってくると合理的に合流点で区切られている。しかし、上って行くと「本流と支流」の考えから、愛媛県の河川図では、足谷川と小女郎川が入れ替わった。足谷川(東平方面→清滝方面)と小女郎川(清滝方面→東平方面)。国土地理院の5万分の1地形図もそれに従って入れ替わっている。国土地理院は現地(市町村)に確認依頼している。新居浜市都市計画課の担当者も確認の返答をしているが、愛媛県の現況河川図を黙認しているので、本来の間違いを訂正して

いない。

小字・小女郎から流れたので小女郎川である。だから江戸時代の絵図にも、清滝側が小女郎川となっている。そして東平側が銅山川となっている。

なお、「足谷川」は「悪しき川」で、人が入山、遡上するには急峻すぎて悪い渓谷で命名された。旧別子にも足谷川があり、高知県にも同名の足谷川がある。

染太夫一代記では、源平の滝と清濁をうまく表現している。

本流と支流の考え方

①河口から一番遠い源流があるのが本流。

父山が源流なので清滝側が本流となる。

②流れを受けられるのが支流で流れを受けるのが本流。

鹿森ダムで水没しているが、落シは二段の滝で清滝側に受けられていたので、清滝側が本流となる。

河川名

河口 ～ 生子橋 ～ 遠登志(鹿森ダム) ～ 河又 ～ 源流
国領川 足谷川 小女郎川 西鈴尾谷川
↓
足谷川

※端出場に芦谷橋、足谷川橋梁が架かっていたので、端出場の所は「足谷川」である。

問題は遠登志から上流の河川名である。昔からの生活感覚としては、銅山絵図に描かれているように別子銅山へ向かうのがメインと考えていたので東平側が足谷川。後になって本流・支流の近代的な考え方が出て来きて、清滝側が足谷川となった。

別子風水害を考える(8号)

明治32年8月28日、別子を直撃し台風を考察している。低気圧進路図は、西南列島東側から足摺・別子・津山を通過して日本海中央を北北東に抜けた台風の進路図である。そして、「気象業務の概観」として明治32年7月4日に九州を縦断した台風時の等圧線、等雨量線、台風経路の降雨量分布図が掲載されている。気象台の仕事の紹介の様であり、別子風水害のデーターではない。我が国の気象観測の開始、台風と梅雨前線の言葉の使用開始が説明されている。気象に関する説明の前座の項の様である。

降雨量、雨量観測、比流量、雨量データーの分析、当日の足谷川の流量推定、見花谷・両見谷の地形と項目を進めている。

別子銅山の煉瓦(9号)・別子山中の煉瓦(15号)・端出場の煉瓦(16号)・東平の煉瓦(17号)・喜三谷社宅跡の煉瓦(25号)・石ヶ山丈駐車場の煉瓦(27号)

別子銅山の山内の煉瓦の刻印から製造先が判明する。日本煉瓦(株)、山陽煉瓦(株)、西讃煉瓦、讃岐煉瓦、堺煉瓦、大阪煉瓦(株)、三津浜煉瓦など。煉瓦に関しては広範囲に歩いて得た貴重な資料である。

別子鉱山端出場を探る（16号・17号・18号）

端出場の地名を考えてみる。立川山村の集落を見ると、本村の南側に中平、奥平、自然坊とあり、対岸に向平がある。そこで立川山村の在所は終わっている。従ってその先は在所の果てになるから、ハテまたはハテバといった可能性がある。別子銅山記念館の考課状の明治18年の分の「土木課所管備林之内私林一覧表」の中にハテバの文字があった。丸尾、吉ヶ谷の場所は分かっているからハテバもその付近と想定する。内除の対岸に井桁マークの土地が2ヶ所ある。広さからみて下の急傾斜地がハテバで、上の緩傾斜地の土地は4反5畝(約4500㎡)ぐらいありそうなので大平だろう。ハテバも大平も在所に隣接している関係から大平は切畑に、ハテバは燃料採取地として利用したであろう。

在所のハテの溪谷が索道基地として明治23年から開発が始まったが地形が狭隘であったから端出場時代は僅か20年程で終わった。(要約)

「果て」は、①終わり、限り。②一番端。果ての使い方は、在所で考えると在所の範囲内になる。しかし、筆者は在所の範囲外にしている。

丸尾と吉ヶ谷が分かっていたら、なぜハテバはその付近になるのか。あくまで仮定であって断定ではない。論証の省略というよりも、論証の欠落である。

考課状の大平の面積は4反5畝(約4500㎡)、ハテバは4反(約4000㎡)である。地図上で計測すると大平の面積は約7300㎡(1.62倍)、ハテバは約6000㎡(1.5倍)。山地なのでこれくらいの誤差があるのか。

足谷川左岸に仮定したハテバが、右岸の端出場にどうして移動したのか。端出場溪谷として包括している。河川の蛇行で対岸に飛び地が出来るが、V字谷では下刻が発達して貫入蛇行となり飛び地はできない。

ハテバがハデバに音変化したと考えているが説明がない。ハテバに漢字をあてると「テ」は「出」にはならない。最初から「バ」は濁音なのに「テ」は濁音の「デ」でなかったのか。

端出場は、中尾の北に移動した後は打除と呼ばれる。打除は、水系から見た地名である。水が障害物に当たって除けたことである。水系地名の前には、山系地名があったのではないかと考える。それが「端出場」である。

「端出場」は実に難解な地名である。⑦に落ち着くまでの考察記録を以下に示す。

①端出場 地中の銅鉱石が坑道内を運搬されて地表に出た所。坑道の端が地表に出た場所。

字面どうりの地名であり、それ以外に説明したものは見受けられない。意外と意味を説明したものが無いのが実状である。しかし、この単純な命名の裏に伝統的の日本文化が由来しているとは、なかなか分からない。

地下の闇の中に長い年月横たわっていた銅鉱石が暗い坑道を通って、太陽の光りが降り注ぐ地表に運びだされ、銅鉱石が鉱石として光り輝く所。それは単なる石が鉱石と判明される時であり、石が鉱石として人間に有用な物質として認められ、その搬出に喝采を受ける時である。そこから鉄路で溶鉱炉に運ばれ紛れもなく貴金属として精製抽出される未来を称賛される瞬間である。

このことは、歌舞伎の役者が揚幕を出る瞬間の出端そのものである。端出場という地名は歌舞伎の「出端」によるものと考えられる。

出端の場所の出端場(ではば)では、音表示すると「出幅」となるおそれがある。「出端」を倒置して表示して「端出」とし端出場としたのではないか。また、「ではば」は、ハレとしての派手の場、すなわち派手場となる。地中の石が地表に出た場所は、太陽の光を受けて黄金に輝き、銅鉱石と言う有用物と認められるハレの場所に由来していると思われる。

開削された第三通洞が地表に出た(当たった)ことを指して命名された東平と一脈通じるものがある。鉱山らしく地中から地表への思考である。

「歌舞伎だけでなく、神楽、能、狂言など日本の伝統的な芸能は、共通して役者の出をことのほか大切にしている。それは日本芸能の特質と言ってもよいようである。

花道を出る役者は、幕揚げを切って出る。渥美清太郎氏は、幕揚げを”花道の末端から一室へ入る所に、境界として掛けてある暖簾幕の称”と記した。

この幕は役者が劇場空間(その意味では聖空間)への第一歩を踏み出すための境界幕なのであった。役者はこの境界を越す事により、全き変身を果たし、その瞬間から劇の中の人物として動き出す。揚幕の中で待機している役者が入れる鋭い気合いは、彼の変身の決意であり、完成を意味している。

能の幕揚げを一種の境界を規定して、鏡の間から橋がかりへ出る時のことを、人間の出生にたとえた口伝がある。”楽屋入りをして、物の色めも見えざる所は、人の胎内に宿る形也。幕を打ち上げ出づる風情、これ人間の生るる形なり”(八帖花伝書)とある。母の胎内にじっと籠もっていた魂が、いま人間となって誕生するところだと言うのである。狂言も同様で、特に”幕ばなれ”と名づけて、出の演技を重視した。」

端出場の地名は、現在の打除をさしていた。石ヶ山丈と端出場(打除)の間に索道が架かっていた時である。明治35年製作の住友金属鉱山の6千分の1の地形図では、現在、端出場と呼んでいるあたりは向平(むかいなる?)と命名されている。

仲持道から見て向こう(対岸)にある平坦地であった。岩盤に当たり蛇行した足谷川が流れを変えて運搬した土砂を堆積して形成したポイントバーの緩斜面が広がったところであった。やがて端出場の機能拠点(打除)から向平に移行すると向平が端出場と呼ばれる。

別子銅山記念館蔵の明治18年の土木課の考課状の中に「ハテバ」の土地表記があることが、「山村文化16号」で発表されているが、最果ての土地の意味らしいが場所が特定されていない。端出場より奥地に別子銅山の本鉱があるので地の果てではない。立川村もさらに南に広がっている。足谷川の左岸、鹿森社宅下を類推しているが、なぜ対岸なのか疑問が残る。

明治22年12月14日の鉱業用軽便鉄道布設願いに対する、鉄道布設許可命

令書には下部鉄道の区間が「角野村大字立川山字端出場より新居浜村字惣開に至り」と字名としてすでに端出場が出てくる。端出場駐車場の図面は、今の打除である。

②端出場 端出場を再考する。日本語をさかのぼると新たな発見がある。

自己の存在領域と領域外とに関する認識として、奥と辺がある。奥は大事な所、価値ある所で、辺は端の所、価値の薄い所である。端は地中に内在していた鉱床の価値あるものに対して価値の無いものとなる。鉱床のある奥に対しての端は、地中では地表である。第四通道で言うと、鉱床が奥で、坑道口が端である。

出（イツ）は内と外とに二分した中で、内にある外からは見えないものが、あたかも存在しないかのように思われていたのが、形をとって外から見えるようになる意である。地中に内在していた鉱床の銅鉱石が第四通道を通過して外に、地表に出ることである。隠れた場所から広い場所に姿を現す意であり、出現する意である。隠れた存在が姿を外に見せる意である。

端出とは鉱床と地表とを巧みに言い当てた重複用語である。

（「日本語をさかのぼる」大野晋・岩波新書参照）

「不思議な漢字」志田唯史・文春文庫によると、端午の節句の「午」は、十二支の「午」ではなく、同音の「五」が書き換えられたものである。中国の古書に、もともとは「仲夏の端五」であって「端」は「始」の意味だから五月の最初の五日のことをいうのに、五を午と書いて間違っているとある。端出場は、出た端ではなく、始めて、または初めて出た場所。これが甲子園なら初出場で感激ものである。

③端出場 端出には「騒がしい」との意味がある。住友鉱山鉄道終点駅の端出場駅近くには、猿飛び峡の別子ライン第二の関門で川幅を絞り込まれた箇所があり、水音が大きくなる。現在、端出場と呼ばれている石積みと端出場水力発電所の間には、ナイヤガラと呼ばれる滝があり、轟いている。川の水がひときは騒がしい場所の意味だろうか。

④端出場 足谷川橋梁も当初は端出場鉄橋と呼んでいた。ハーコート社の図面の裏には毛筆で「端出場鉄橋」と書かれている。また、小川東吾の明治26年の見積書も「端出場鉄橋」と書かれている。県への申請書類では足谷川に架かる橋とした方が分かりやすい理由からか谷川橋梁と表記した。かつて端出場と呼ばれた土地は打除と呼ばれるようになり、打除鉄橋とも呼ばれるようになった。マイントピア別子の整備での施設説明板は「打除鉄橋」となっている。

中尾トンネルも当初は端出場隧道と呼んでいた。昭和25年の写図には「端出場隧道」と書かれている。中尾の尾根の下をくぐるので中尾トンネルと呼ばれるようになった。

端出場の中心地が端出場鉄橋を渡り、端出場隧道を潜り抜けたトンネルの北側の向原は、端出場隧道北口にあたり、そこも端出場の呼称になったと考えられる。端出場の地名が橋を渡り、トンネルをくぐって移動してきた。

別子鉱山鉄道略史補遺の中にある住友鉱山鉄道の愛媛県への申請書（コピー）には、角野大字立川字端出場と有るのを確認する。

別子鉱山鉄道端出場鉄橋、別子鉱山鉄道端出場隧道は平成21年8月7日に国の登録有形文化財に登録された。

- ⑤端出場 山形県の出羽は、「いずは」と言っていた。入峰して出峰する場所である。入り峰は、一度死ぬことであり、出峰は再生して生まれることである。出羽は出場か。「端ーイズハ」は、山から出てくるところの山の端。
- ⑥端出場 ハシ、ハチ、ハツ、ハテ、は語源を同じくする土地の端または境を示す。「ハ・デ・バ」は「ハテ・バ」で漢字表記なら「端場」となり、土地の端を示す。地形から尾根の端。
- ⑦端出場 旧別子に「高橋」の地名があり、高い尾根の端が谷に落ちる端っこである。尾根の端が出っぱった場所である。V字谷を形成している足谷川の中で、石ヶ山丈の南から下りて打除社宅跡をとおり打除に続く尾根は顕著な尾根である。東平の尾端も尾根の端なので、同じ語源である。

下部鉄道と上部鉄道を結ぶ索道基地の一端が、端出場である。索道のもう一端が、石ヶ山丈である。これもまた難解地名である。石ヶ休場と間違っ読まれ、別子銅山史を今だに迷宮入りさせているので、石ヶ山丈も説明しておく。

石ヶ山丈 谷有二の「山の名前の謎解き辞典」(青春文庫)に、「ジョウ」「ヤマ」は接尾語で「山」の意味。地形用語の「ジョウ」は崖の意味となる。伊豆に「発端丈山」がある。

丈が山の意味だと、石ヶ山丈は石ヶ山山となって不自然である。丈が崖の意味だと、石ヶ山丈は「石ヶ山の崖」となる。石ヶ山の崖、石ヶ山の崩れなら石ヶ山丈の上に見えるピークが石ヶ山か。上部鉄道は足谷川が掘り込んだV字谷なので、石ヶ山丈はまさに崖である。

炭が燃えきって灰になることを「ジョウになる」という。能でいう翁を「尉^{じょう}」というところからである。翁は黒髪が白髪に変わっていく。黒い炭が白い灰になる。焼き固まった炭が燃えて灰となり崩れるので、地形用語で「ジョウ」が崩落地形、崖の意味を伴う。「ジョウ」の音に「丈」「城」の漢字を当てた。

別子銅山の歴史と自然(24号・25号・26号・27号・32号・33号)

誌上での旧別子登山を試みて連載が始まる。日浦登山口から縁起の端まで24か所の紹介文が掲載されている。その後も歓喜坑・歓東坑を経て大和間歩、銅山峰、角石原、東平、落シのコースの紹介文の原稿は続いていたのであろうが、書き手がいなくなり絶筆となった。

旧別子登山のガイドブックで周知であるが、26号の「山神社」は、取り壊されているので当時の写真は貴重である。

やさしい別子銅山のあゆみ(26号)

8回の「ボランティアガイド養成講座」を終えて、引き続き「学習講座」を始めた第2回目の平成12年5月18日に「歓喜の鉦山」の編集者として高橋利光さんに登

壇してもらった。その時の原稿を整理して山村文化に掲載したものである。

その後、平成16年度に写真を増やして「別子銅山のあゆみ」の表題で小冊子にした。「歓喜の鉱山」のダイジェスト版といったところである。

「学習講座」は46ヶ月続いた。養成講座からだと同算で54ヶ月となる。4年6ヶ月も続いたことになる。毎回、別子銅山に関するスペシャリストの講話であった。文字起こしをしていたら「別子銅山のあゆみ」のような資料になっていたのにと口惜しまれる。この学習講座には、新居浜南高等学校の情報科学部(現在のユネスコ部)がいっしょに学んでいた。今やユネスコ部は、全国区で活躍する新居浜市の顔の一つに成長している。

源兵衛鋪 (34号)

別子銅山が開坑した頃に、勘場に源兵衛なる男が菜種粕を売りに来た。別子銅山や立川銅山の鋪ではなかった。手代が鉱石の質の低下を言ったばかりに、怒って雲隠れしてしまった。昭和23年に新しい鉱源の開発起業が発表され、その中に源兵衛鋪の探索があった。伝説の内容からして大山鉱坑、金鍋坑、綱繰坑のどれかとなる。金鍋坑の可能性が高く、新規鉱源を目指して探鉱調査となった。(要約)

ダイヤモンド水の説明文に噴水の由来を読むが、約250年後に探鉱調査に駆り立てた源兵衛の伝説にロマンを感じる。

昭和34年に伊予レポートが発行した「新居浜地方の全貌」に伝説が掲載されていたので収録する。

源兵衛の悲愁

長兵衛と元禄4年別子入りして以来、品位の高い鉱石を掘り、この立派な鉱石が何処から出るのか誰にも一切判らなかつた。住友でも当初は高く評価して買っていたが、源兵衛も遂に安値では売らぬこととした。

元禄5年12月、住友は源兵衛のを一切買い取らぬことを明言し、正月も間近化になって困った彼は、値下げするからと再三交渉したが住友は取りあわなかった。遂に覚悟の源兵衛は一家挙げて死に就く決心をし、多くの知人に離別のあいさつをして源兵衛が平素掘っていた所の中に籠り、自ら坑道口を塞ぎ冥界に赴いた。

見送りの人達に「皆さん、私の道連れの子が鳴いているうちは私達も生きていますが……。」と完全に穴を塞いで了った。約1週間鶏鳴が人々の棟を和らげたが次第に細く、遂に聞き取り事も亡くなった。その後、老練の坑夫や祈禱師までも探したが、源兵衛が掘り出していた鉱石の埋蔵箇所は遂に見えなかった。

4. おわりに

山村文化は定期購読者として会員の知人から受け取っていた。新しい切り口で果敢に挑戦しているとの感想を持っていた。

別子銅山や立川銅山のことをもっと知りたいが、山村文化の原点であった。言い換えれば、知らないことを自覚して、知らないことについて素直に疑問を抱き、疑問を解決しようと探求を始めて知識や情報を集めてきた。やがては「新居浜学」を築き上げていくとの大きな夢があったと思う。

別子銅山記念図書館で「別子銅山を読む講座」を始めて別子銅山の関係図書を詳細に読んでいくと、山村文化の投稿の中にオリジナルなものを見いだせない。歴史を研究するに当たって一次史料が扱えないところの限界を感じる。現地を知っている強みも問題提起にはなっていないが、歴史を解き開くところまで至っていないように感じる。それで二次史料の情報を満たしていけば、その中にオリジナルな考えが出てくると思うが、矢張り情報量が少ないのは否めない。アカデミックな視点が弱かったのだろうか。地方での郷土史研究に当たっての洞見の大切さと限界を感じてしまう。

令和2年9月に突然に第36号が発刊された。「歎喜の鉦山」発刊後の調査・研究成果を集大成した単行本である。あかがねの町・新居浜を訪ね歩く待望の手引書となる。

「山村文化」総目録

2020年4月16日

別子銅山記念図書館・郷土資料

号数	標題	
創刊	山村研究会発足にあたって 特集－立川銅山道	伊藤玉男
	泉屋道と立川銅山道筋(上)	伊藤玉男
	立川銅山道筋	高橋 幹
	立川銅山道を探る－1枚の絵図から	塩田康夫
	地名あれこれ－西赤石	伊藤玉男
2号	泉屋道と立川銅山道筋(下)	伊藤玉男
	菅平発見記	高橋 幹
	立川銅山上野吹所	塩田康夫
	第一回現地研修に参加して(中七番)	西 俊明
	地名あれこれ－前山・山方・木方	伊藤玉男
3号	山村と東南アジア	藤本鐵雄
	別子山の木地屋	伊藤玉男
	別子銅山への電気導入について	二ノ宮馨
	旧広瀬邸－遠州流に関する一考察	高橋 聡
	土佐への道筋－序説	塩田康夫
	別子銅山の遺跡－第二通洞	高橋 幹
	地名あれこれ－大阪屋敷	伊藤玉男
4号	「日本の鉱山文化」展を見て	松下博彦
	笹ヶ峰修験道と清滝信仰(上)	伊藤玉男
	土佐への道筋－須領道	高橋 幹
	岩屋－赤石越えの道	塩田康夫
	第二回現地研修会報告(土の峠～須領道～黒石)	工藤 順
	別子銅山の遺跡－上・下部鉄管道	高橋 幹
	「歓喜の鉱山」編集を終えて	高橋利光
5号	銅の道(講演録1)	伊藤玉男
	鉱山と市民を読んで	藤本鐵雄
	いろりを囲んで	福本成臣
	再び立川銅山道について	塩田康夫
	別子銅山の遺跡－出合峠界限	高橋 幹
	地名あれこれ－豊後・余慶	二ノ宮馨

6号	「えひめの山旅 赤石の四季」発刊のご案内 炭の道(講演録2) 炭中宿小坪谷は何処に 別子銅山の遺跡ー炭中宿 別子銅山ー明治期の数值試算 地名あれこれー瓜生野 第三回現地研修会報告(中の川～出合峠)	西 俊明 伊藤玉男 高橋 幹 塩田康夫 高橋利光 二ノ宮馨
7号	笹ヶ峰修験道と清滝信仰(下) 佐島製錬所跡見学記 保内町を訪ねて思うこと 海のあらがね道 別子銅山の遺跡ー寛永谷収銅所 地名あれこれー銅山峰 谷の名がどうして変わるのか 赤石山系の民話(一)	西 俊明 伊藤玉男 寺西啓容 藤本鐵雄 塩田康夫 高橋 幹 伊藤玉男 二ノ宮馨
8号	第四回現地研修会報告(フォレスターハウス) 熊野の森に生きる (1) 「幽翁」を読み直す 別子風水害を考える 別子銅山の遺跡ーセリ割隧道 別子炭中宿ー遺稿 地名あれこれー樅の木 赤石山系の民話(二)	西 俊明 宇江敏勝 藤本鐵雄 二ノ宮馨 高橋 幹 塩田康夫 伊藤玉男 安森 滋
9号	別子銅山の煉瓦 熊野の森に生きる (2) 「箱廻し」又は「デコ廻し」 地名あれこれー夏切 哲人の墓碑 別子銅山の遺跡ー都間符 赤石山系の民話(三)	伊藤玉男 宇江敏勝 木村 章 二ノ宮馨 伊藤玉男 高橋 幹 安森 滋
10号	節目によせて 特集ー私と別子銅山 第五回現地研修会報告(四阪島) 四阪島の歩みを辿る 地名あれこれー筏津	伊藤玉男 高橋 聡・木村 章・高橋利光・塩田康夫 高橋 幹・西 俊明・山本啓二・寺西啓容 寺西啓容 藤本鐵雄 伊藤玉男

	別子銅山の遺跡－高橋製錬所	高橋 幹
1 1 号	銅山峰の落葉松	伊藤玉男
	別子銅山の石垣 1	高橋 幹
	写真は語る－前山と牛車道	編集局
	第六回現地研修会－写真文化の村	
	地名あれこれ－保土野・白猪谷	二ノ宮馨
1 2 号	新たな出発	高橋 幹
	再生の自然(上)	伊藤玉男
	土佐への道筋・再び	塩田康夫
	端出場いまむかし	橋本久美子
	写真は語る－勘場	編集局
	別子銅山の遺跡－金鍋坑	高橋 幹
1 3 号	再生の自然(下)	伊藤玉男
	新居浜の思いで	吉田知之
	別子銅山の石垣 2	高橋 幹
	写真は語る－目出度町風呂屋谷	編集局
1 4 号	旧広瀬邸改修工事の概要とその意義	高橋 聡
	別子銅山の遺跡－石ヶ山丈停車場跡	高橋 幹
	三ツ森峠を越える－高藪発電所建設	二ノ宮馨
	写真は語る－旧吹所	編集局
1 5 号	別子山中の煉瓦－中間報告	高橋 幹
	山の町・東平	高橋利光
	第八回現地研修会報告(上部鉄道)	吉村久美子
	地名あれこれ－長門・殿ヶ関	二ノ宮馨
	写真は語る－高橋製錬所	伊藤玉男
1 6 号	特集－端出場	
	別子鉦山端出場を探る 1	伊藤玉男・山川静雄
	端出場の煉瓦	高橋 幹
	地名あれこれ－端出場・打除	二ノ宮馨
	端出場及び鹿森での生活	山村研究会
	別子銅山豆情報－端出場水力発電所	高橋利光
1 7 号	特集－東平と端出場	
	東平での生活文化探求	山村研究会
	東平の煉瓦	高橋 幹
	別子銅山豆情報－住友別子病院東平分院	高橋利光
	別子鉦山端出場を探る 2	伊藤玉男・山川静雄

	東平・端出場関連別子銅山略年表	編集局
18号	別子銅山端出場を探る 3 第九回現地研修会報告(端出場・鹿森) 住友有芳園を訪ねて 別子銅山豆情報－鉱山従事者	伊藤玉男・山川静雄 工藤 順 高橋利光 編集局
19号	東平の鉱山関係施設 カラマツの故郷紀行 別子銅山の遺跡－小足谷収銅所 別子銅山記念館の設立と運営について	編集局 編集局 伊藤玉男 高橋 幹 別子銅山記念館
20号	五年を迎えた山村研究会 特集－私と山村文化 山村文化－更なる飛躍に向けて 新居浜と文化 近代化産業遺産 第十回現地研修会報告(佐々連鉱山) 川之江－柳陣屋門 勤労者の貴重体験 箱膳	高橋 幹 高橋利光 近藤哲也 高橋 聡 近藤哲也 塩田康夫 久川利幸 伊藤玉男
21号	特集－四阪島 座談会 四阪島関係資料－変革・略年表 別子銅山の遺跡－煙突山 お稲荷さんを訪ねて	山村研究会 高橋 幹 伊藤玉男
22号	特別企画－新春座談会 会長あいさつ 講演－絵図から見た別子銅山の神格化 座談会 写真は語る－木方再考	山村研究会 高橋 幹 末岡照啓 伊藤玉男
23号	点の記で見る別子銅山 別子本舗 蘇った鹿森	高橋 幹 伊藤玉男 山川静雄
24号	ノリイモとタズ 別子学園沿革誌－明治期 別子銅山の歴史と自然 1 インタープリテーションについて	伊藤玉男 佐々木由貴子 伊藤玉男 高橋 聡
25号	別子大立坑と巻揚機	木邑 章

	喜三谷社宅跡の煉瓦	高橋 幹
	別子銅山の歴史と自然 2	伊藤玉男
	第十一回現地研修会報告(市之川鉦山)	近藤哲也
26号	やさしい別子銅山のあゆみ	高橋利光
	再び箱廻しについて	木村 章
	別子銅山の歴史と自然 3	伊藤玉男
27号	石ヶ山丈駐車場の煉瓦	高橋 幹
	坑内下部排水の問題に対する私見	木村 章
	別子銅山の歴史と自然 4	伊藤玉男
28号	別子銅山産業遺産の残存状況 1-四阪島	吉村久美子
	ナスビ屋敷伝説	高橋 幹
	頼み寺	伊藤玉男
29号	別子銅山産業遺産の残存状況 2-四阪島	吉村久美子
	16番本坑を基地とし、新竪坑を通ずる排水計画	木村 章
	第十二回現地研修会報告(東平・端出場・広瀬)	山村研究会
30号	産業遺産	高橋 幹
	別子銅山産業遺産の残存状況 3-四阪島	吉村久美子
	排水計画について	木村 章
	写真は語る-東延(上)	伊藤玉男
31号	写真は語る-東延(中)	伊藤玉男
	別子銅山産業遺産の残存状況 4-四阪島	吉村久美子
	別銅山の煉瓦-その形状からみた分類	高橋 幹
32号	写真は語る-東延(下)	伊藤玉男
	別子銅山産業遺産の残存状況 5-四阪島	吉村久美子
	別子銅山の歴史と自然 5	伊藤玉男
33号	多田銀銅山研修紀行	伊藤玉男
	新指定の文化財-別子山地区	伊藤 聡
	別子銅山の歴史と自然 6	伊藤玉男
34号	写真は語る-東延(終)	伊藤玉男
	座談会-中七番を語る	
	源兵衛舗	伊藤玉男
35号	別子ライン・ノート	高橋利光
	新文化財紹介-広瀬家墓所	
	御報告	事務局
	現地研修会のご案内-別子銅山写真展	
35号	銅山峰を仰いで	高橋利光